

東方朔目耕

近世陰陽道書の読書態様とその意義

小池淳一

一 問題の所在

読書を単純に書物を読むという行為であると狭く規定すると、いくつかの問題が取り残される。一冊の書物にたどりつくまでの過程や書物の選択の基準、読むという行為を黙読に一元化する誤り、さらに保存保管の場所や読書によって得られた知識や情報の行方など、読書という語に包摂され、かえって見過ごされかねない事象は決して少なくない。

本稿では貞享三年（一六八六）に板本の刊行をみた『吉凶考東方朔秘伝置文』が、庶民生活に与えた影響をいくつかの史資料に即しながら検討してみたい。同書の成立過程については既に試論を述べたことがあり、民俗事象に見いだされる幾つかの問題についても考察を行なってきた。ここでは一七世紀の書物がその後、どのように読まれ、認識されてきたかについての一種の読書の民俗を探る試みとして重複を厭わずに検討してみたい。

二 『東方朔秘伝置文』の読書態様

大阪府柏原市の三田家は俳人、三田浄久を生んだ家であるが、浄久の次男、浄賢（寛文七年・一六六七～享保一八年・一七三二）が記述した借用本の覚え書きが「書籍出入覚」と題されて残されている。この資料は長友千代治によって翻刻、紹介されたが、河内の知識人の読書生活がよく示されている貴重な資料である。このなかで三田浄賢は『東方朔秘伝置文』の感想を享保五年（一七二〇）四月二十五日の条に書き付けている。それは

吉凶占

一 東方朔秘伝置文 巻札

貞享三丙寅年板森田庄太郎板

此本無益ノ本也作り事也偽り事也

代 巻刃五分

というもので辛辣な言葉が『東方朔秘伝置文』に投げつけられている。浄賢がいうように、『東方朔秘伝置文』は果たして完全に無益で偽りに満ちた書物なのであるか。もしそうだとするならば、浄賢はどういった見地あるいは視点から、この書を断じたのであろうか。この資料からはそうした具体的な根拠は読みとることができないものの、旺盛な読書力を持っていた彼が、そこから得た知識をもとに一種の欺瞞を、『東方朔秘伝置文』に感じていたことはうかがえる。

確かに『東方朔秘伝置文』は後にもふれるようにその年の干支によつて農事の吉凶、天候、災害、疫病などを予言してある部分を中心に、生活のさまざまな場面を陰陽道に端を発した暦法の知識や日月星宿等の観察によつて判断し、吉凶を占い、意味づけをおこなった書物である。何よりも六〇年を周期として農事、天候が循環するのだとする主張は、浄賢のみならず、現代の我々も容易に受け入れ難い奇想天外な書物といわざるを得ないものかもしれない。

ところが、一八世紀の前半にこのような評価が知識人からは下されていたにもかかわらず、『東方朔秘伝置文』は別の場所で異なった観点からは重要視され、さまざまな読書態様を示していたことも想起されねばならない。東北地方の農村における民俗的な生活の諸現象をみていく時にそれははっきりと浮かび上がってくる。

青森県上北郡野辺地町の旧家、浜中家に伝来した文書に『年々豫手扣』と題されたものがある。これは同家の八代目九八（明治七年・一八七四、六一歳で没。同家は代々、九八を襲名）が、慶

応元年（一八六五）から明治五年（一八七二）までの間、この地方の天候、気象、作物の出来不出来、さまざまな事件、伝聞などを書き記したものである。記事の興味の中心は、表題にもあるように、天文事象から、農事の豊凶を予測することにあつたらしい。この近世末の覚え書きに次のような記事がある。明治二年（一八六九）の八月の条である。

此年八月秋分之日、日の入時西ノ方二白キ雲あれば其年豊にして五穀みのるト東方朔にある、当秋分二は西ノ方上雲煤け候様之雲中二は白キ雲見へて矢張所々二白キ雲見得申候

言うまでもなく、ここの東方朔とは『東方朔秘伝置文』をさすものだろう。秋分の入り日の雲の色が豊凶を推測する材料となるというのである。板本の『東方朔秘伝置文』をみると巻上二に

秋分の日、日の入時分西の方に白き雲あるハ、そのとしゆたかにして五穀みのる。雲なきは霜多ふりて人民わつらふ事、来年の二月までにいたるへし。

という記載があり、『年々豫手扣』の記述はこの部分を前提として、この土地の状況を勘案して豊凶を推し量ろうとしていたことが理解できる。『年々豫手扣』にはもう一箇所『東方朔秘伝置文』を参照していたことが明らかな部分がある。それは翌明治三年の立秋の条である。ここには

此年立秋之日申ノ時昏迄は晴天ニ御座候得共夫より曇り薄黒
キ雲覆へ空一はい雨降り之模様ニ御座候東方朔二有之申候

という記述があり、やや不明瞭であるものの、立秋の日の申の刻の雲の様子を気にしており、『東方朔秘伝置文』の記述内容と対照されているらしいことがわかる。これも板本の『東方朔秘伝置文』の巻上二に

立秋の日、申の時西南のかたに赤き雲あれは粟米のるいによし。雲なき八万物ミのらず、地震あり。牛馬わつらいおほく死する事、来年の正月までにいたるへし。

という記述があることがこうした観察と記述との前提にあったものと考えられる。さらに『年々豫手扣』には「曆指南」なる書物も参照していることがうかがえる部分もあり、こうした書物を参考にしながら、さらにいうならば、自然天候の理解の枠組みとして利用しながら農事等への予測、判断を行っていたことがわかる。これは三田浄賢が『東方朔秘伝置文』に下した判断とは全く正反対のものであり、場合によってはその認識の幼稚さを指弾しなければならぬ事柄かもしれない。しかし、読書の目的として考える時には、目の前の自然現象の観察との対比しつつ、その理解のための参考として利用されているわけであり、理由はうかがえないにしろ単純に「無益」「偽り」「作り事」とするよりも科学的には公平な態度であるということもできよう。そして、こうした読書の姿は他の地域からも報ぜられているのであった。

岩手県花巻市域からの戦前の報告は次のように記述されている。

いつの頃からか不明である。この地方（岩手県稗貫郡花巻地方 引用者注）の舊家では「東方朔秘伝置文」といふ古寫本をたいていは所持してゐる舊正月十五日の夜、百姓達はそこに行つて、置文をみてもらう。これは男衆の事であるが、女達は、「御歳神様」を遊ばせると稱し、巫子の所に行き、豊凶について聞くを例とする。

本年の置文は次の如く出る。
丁丑の年は二月大風あり三月雨あり、牛馬わつらひ多く死す。四月五月疫病流行る。六月七月雨降り雷なる。八月水あり麻絲又胡麻類よし、冬の氣に至りて寒する水大いに凍る。

この記述はこの地域において『東方朔秘伝置文』は単なる書物ではなく、巫女（子）の占いに対応するものであり、一年間の農事の行く末を知ろうとする場合、なくてはならないものであった。巫女の占いといい、「無益」「作り事」「偽り」の書に頼ることはい、東北に暮らす庶民の知識の遅れ、「頑迷さを嗤うことはたやすい。しかし、こうした習慣を作り上げてきた庶民生活の歴史や進歩を目指した努力までをも嗤うことは決して許されない。現在の科学の水準や農事に深くは関与しなかつた知識人の立場から『東方朔秘伝置文』とそこから惹起されるさまざまな問題を処断するのではなく、生活の内側から、さらに庶民にとっての書物の意義

といった観点からそれらの問題を考察していかねばならないのである。

そうした点からここで見逃せないのは、『東方朔の置文』は各自が銘々に読むものではなく、読んでもらうものであったという点である。三田浄賢がどのように多くの書物を読んだかについては、その現場を復元するという点では資料がなく、難しい。しかし、浄賢はたぶん、多くの書物をすらすらと何の苦もなく読み、それらを組み合わせ、自らの知的な経験を編み上げていったものと推測される。このことはまた『年々豫手扣』を残した浜中九八も同様かもしれない。こうした文字に慣れ親しんだ人々による読書に対して、花巻の農村における読書は、文字を解する者を核とし、書物の内容を音声にして伝えるという形態がとられていたのである。これを一種の「読書共同体」ととらえることも許されるだろう。さらにその声は巫女の託宣とそう遠く隔たらない時空において響くものであった。

ここから、『東方朔秘伝置文』が一種の超自然の存在、神霊からのメッセージとしてとらえられていた可能性までも想定する必要があろう。そうした場においてはこの書物は、単なる情報の入れ物や文字の集積ではなかったのである。

『東方朔秘伝置文』を用いて作柄の占いを行っていたという報告はまだほかにも存在する。山形県の荘内民俗学会の戦後の報告によれば、山形県東田川郡朝日村の荒沢では正月の丑の日が豊凶に関わるとされており、「予兆」の項に、「丑の日」という項目が立てられ、次のように記述されていた。

正月中の丑の日によつてその年の作がどれ位か知ることが出来るという。丑の日は正月一日から五日までの間にあれば、伏せ丑（一日・二日・三日と梅指から指折り数えると一日から五日までは指が伏せられるから、これを伏せ丑といい、六日からは指が起されるから「起き丑」というのである）だから豊作で、六日・七日が丑の日であると『起き丑』で凶作だといふのである。

更にその作柄の程度も知ることが出来るのであるが、例えば、二日が丑の日であると、稲二束を背負う時に起き上るに容易でない程よく稔つて上作である。『起き丑』では、七日に丑があると、七束背負うても楽に起き上ることが出来る位稔りがよくないと判断するのである。昔はこのように判断するものもつともつとも多かつたといふことである。尚これらはもともとは主に、東方朔の書いた置文をみて知つていたのであるといふ。『東方朔の置文』を持つている家は二戸ある。安達善作氏のもは写本で、文久三癸亥年正月と年号がついてゐる。安達久太郎氏のもは、明治二十二年印刷（版木で翻刻）した和文（五寸五分×三寸五分）三十四頁のものであつた。

この東方朔といふ人は、シナの人で、九百年も長生きをし、長年の経験を書き残して置いたのが、この置文であるといふ。摩耶山の蔭の越沢の野尻仁平氏でも『東方朔の置文』を利用してゐたが、昭和二十六年の火災で失つたといひ、このほか庄内地方にも各地で利用されていたようである。

ここでは丑の日に関する予兆の伝承の淵源として、『東方朔の置文』が挙げられている。しかし板本の『東方朔秘伝置文』にはこうした「伏せ丑」「起き丑」に関する記事は見いだすことができない。安達久太郎氏のものとして言及されている明治二二年の和本は『年中運氣日和考東方朔秘伝置文』として出版が確認されているもので、その内容は貞享の板本を踏襲している。少なくとも安達久太郎家の本については「伏せ丑」「起き丑」という記述は存在していないにもかかわらず、記述されていると考えられていたことになる。実際には記載されていないにもかかわらず、『東方朔の置文』にあると考えられていたということはどういった意味を持つのであろうか。これは、書物の上に記載されているかどうかという判断は、荒沢においては問題にならず、検証もされなかったということを示している。

この地域において『東方朔の置文』は、こうした豊凶の予兆を記してあるという認識に取り囲まれていたのであり、さまざまな知識を記した書物として遇せられていたのであろう。いわば『東方朔の置文』はそうした民間の知識が文字によって集積されていくの一つのかたちとして現れているのであり、実際にどのようなことが書かれているかについては問題にならなかったのである。さらに先に検討した花巻での例をふまえて考えると、「東方朔」なる語が民間の予兆に関する知識の名称として一定の権威を文字を十分に解し得ない人々の間には有していたとも考えることができる。よ。

そうした靈妙と称してもいいような、神秘的な力を『東方朔の置文』が持つようになったのはどういった経緯が想定できるので

あろうか。そうした権威の生まれかたは、文字にはそこに記されている内容にとどまらない意味が宿っているという一種の文字信仰があつたことは容易に想像できる、しかし、近世期に刊行された書物は極めて膨大であつたし、その中で農事に関連した書物もまた枚挙に暇がない。さらにいわゆる農書のような実用的かつ科学的な知識を収載したものも少なくなかつた。どんな書物でも『東方朔秘伝置文』のような扱いを受け、地位を築いたのではない。『東方朔秘伝置文』でなければならなかつた理由がそこにはなければならぬ。その点について次節で考えてみよう。

三 『東方朔秘伝置文』と長寿伝承

『東方朔秘伝置文』が近世に刊行された種々の書物のなかでも独特の位置を庶民生活のなかに占めてきた理由には、その内容もさることながら、東方朔の名を冠した題名であつたことが大きな役割を果たしていたのではないかと推測される。この点についてはかつて東方朔という名辞が日本各地における伝承のなかでどのように表われているかについて、具体的に検討したことがある。⁽¹²⁾ここではその後に管見に入つた資料を紹介しながら、再度、考察を進めていきたい。

伝承資料のなかにおいて東方朔の名は長寿の人物、さらにその名を挙げることによって言祝ぎの意義を有することが知られている。それはさまざまな伝承のなかに流入しており、網羅することは難しいとさえ考えられる。たとえば、青森県南部地方の巫女（イタコ）たちが唱えてきた祭文のなかには

この殿の とくうたもつは五百歳 うどんづるは四千歳 うちづら王は八万歳 浦島太郎は七百余歳 東方朔は九千歳のち延びだは十万歳⁽¹⁾

という文言がある。これは八戸市の根城すゑ巫女（明治二四年生まれ）の伝承していた「えべす」であるが、浦島太郎と並んで長寿の人として東方朔が言挙げされている。これは謡曲「東方朔」などでも知られる東方朔の異常な長寿がこうした詞章のなかにも取り込まれていると考えられる。しかし、民俗文化のなかにはやや異なつた角度から、この東方朔の長寿を語る場合もあつた。

山形県飯豊山麓の西置賜郡小国町小玉川の佐藤とよい媪（明治三五年生まれ）は、この地域屈指の昔話の語り手であり、八〇余話の伝承者である。小野和子がまとめた『長者原老媪夜話 山形県飯豊山麓の民話』には、この優れた語り手の伝承が丁寧にとらえられている。そのなかの「九千年生きる老けずの貝」は次のような語りである。

むがしあつたけどやね。

ある村に、ぞつくりした男年寄り衆、いであつたどお。

ある庚申^{こうしん}の夜、その年寄り衆あつまつて、

「今夜はお庚申さまだから、お庚申さま待ちしねえが」

つて、四、五人で村はずれの家にこもつていたどやね。

したば、よなよなと白髪^{しろがみ}のじさ来て、

「おやおや。おれば待つていでくつたが。ありがと。ありが

と

つて言つて、流しさ行つて、ごづりごづりとなにか切つて小ちえ鍋^{なべ}さ入れて、囲炉裏^{いろり}の鈎^{かぎ}さ引っかけで、また流しさ行つて、なにしているんだか出てこねじもの。そのうち、鍋のものが、ごとりごとりと煮立^{にた}つてきたども、じさ、まだ流しから出てこねえどお。

そうしつど、一人のじいちゃん、そつと鍋のふたすかして中身ば見たどやね。なんだか赤子^{あかこ}切つたよなものを煮えていだじもの。

「なんだ、なんだ、こいつ、赤子^{あかこ}でねえか。おらはこんなもの食^かねえから、帰^{かえ}る帰^{かえ}る」

つて逃げでいつたどお。一人帰^{かえ}り、二人帰^{かえ}りして、一人のじいちゃんのこして、みんな帰^{かえ}つてしまつたじもの。じいちゃんは、

「これは庚申さまに相違^{さうい}ねえ。庚申さまが赤子^{あかこ}食^かつはずねえ。

おれはここいてご馳走^{ちそう}になる」

つてのこつたじもの。鍋のものがごことごと煮あがつたころ、

白髪^{しろがみ}のじさ、流しから出はつてきたつけが、

「おやおや。お前^め一人になつたが。みな帰^{かえ}つたが。いい、いい。鍋の中身見たな」

つて。

「これなあ、赤子^{あかこ}のように見えるども赤子^{あかこ}でねえ。これは老けずの貝^{かき}というもんで、この肉食^{にく}うと九千年生きられる。みんなにご馳走^{ちそう}すべえと思つたども、いい、いい。お前^めにご馳走^{ちそう}すつからつんと食^かえ」

つて。

「そしてな、ながなが生きて、東方朔の作試しというものを試せ。九千年生きれば、正月一日の朝げの雲立ちで、その年の出来事からなにからみなわかるようになってから。それが東方朔の作試しというものだから、お前、長生きして、それを本に著せ」

つて、老けずの貝をご馳走してくれたやね。

そしたば、庚申さまの言つように、じいちゃん長生きして、正月一日の朝げの雲立ち見て、やれ疫病あるとか、風吹くとか、朝霧だとか夕霧だとか、みんな言いあてておしえてくつだもんだとお。

そして、九千年生きて『東方朔の作試し』という本を著したんであったとお。

その本、泉岡の久助の家にあったの、おれ見たことあったんだが、いつのまにかなくなつたものなあ。惜しいことをしたんであったとお。

とんぴんからりん

庚申講の晩に老けずの貝を食べた人は九千年生き、正月の作試しをするようになり、さらには『東方朔の作試し』なる書物を著わしたのだという。この報告の注によれば、泉岡の久助の家とは、とよい媪の生家であるという。とすれば、この昔話は久助の家に伝わった『東方朔の作試し』という書物の由来譚であり、その書物の縁起を示すものであった。

庚申講が行なわれるいわゆる庚申の晩が、昔話の場としても重要であり、こうした長寿の伝承を説く場でもあったことは、はや

く野村純一が説くところであった。さらに庚申講そのものを舞台とするこうした長寿の由来の昔話は、主人公を八百比丘尼として語られることも多かったことにも注意しておきたい。そのことは、庚申信仰の利益として、こうした伝承が持てはやされてきたことを示している。

また、藤田栄子の調査によると秋田県由利郡岩城町上蛇田の吉田伝次郎翁（大正元年生まれ）は、庚申講を行なったヤドで出された料理の一部を自宅に持ち帰り、翌朝に家族に食べさせる習いを守ってきたという。そしてそのいわれとして、次のような話があった。

昔、カノエサマの日に東方朔が講に招かれた。ヤドの主人が出した料理は赤ん坊のような形をした赤い木の実だったの、誰も手を付けようとしなかった。そこで、東方朔が帰る時、主人はその料理を藁ツトに包んで持たせた。帰宅した東方朔が料理を一口食べてみると、それはそれは美味だったの、残らず平らげてしまい、藁ツトは馬小屋に投げてやったから馬が食べた。東方朔も馬もたいそう長生きしたそうなの。

ここでは東方朔の書き遣した書物は登場しないが、やはり庚申信仰の場がこうした長寿伝承と密接にかかわっていたことをうかがうことができる。

以上の伝承資料の検討から明らかになってくるのは、庚申講などの庚申信仰の利益や靈験を説くなかに長寿に関わるものがあつたこと、その説話的な説明に、長寿を保つた人物の名として東方

朔が登場することが少なくなかったということである。もっとも、登場人物の名としては八百比丘尼の場合も多く、また長生きした人の名をはつきりとは伝えない場合もあったことから東方朔の名が、こうした庚申信仰の説話に採用されていくのは、後のことではないかという推測も成り立つ。少なくとも、第一節で考察を加えてきた『東方朔秘伝置文』の読まれ方を考慮に入れると、庚申信仰の長寿を説く利益譚と『東方朔秘伝置文』、さらにそこに記載されたり、記載されていると受けとめられてきた農事と干支とを結びつけるさまざまな知識とは相互に依存しあうかたちで庶民生活のなかの東方朔に対する認識を形成してきたのであり、人々はこうした伝承を背後に持つ東方朔の名によって長寿と経験の蓄積とを信じ、書物の価値を判断していたのである。

換言すれば東方朔を主人公とする伝承の意義は、異例の長寿を言いながら、それ故に可能となつた経験の集積に現実味を持たせるところにあつた。そして東方朔の名は長寿の伝承を理由づけとして採用しながら、さらに干支の認識を媒介にして、生活経験の蓄積に向かつて開かれていくということが、『東方朔秘伝置文』をめぐる読書の外延として重要であると言えよう。次節では、『東方朔秘伝置文』の内部の記述内容に関して若干の検討を行なつて、さらに考察を進めてみたい。

四 板本『東方朔秘伝置文』と写本『東方朔秘伝』

前節までの検討を通して、『東方朔秘伝置文』を読み、利用するということは、板本の内容を一字一句、忠実に信じることや理解

することではなく、眼前に展開する農事を中心とした生活の経験と照らし合わせながら批判的に解読したり、自己の経験や実際に起きた出来事を追加していくことであつたと考えられる。そうした点からすれば、板本の内容を取り上げているだけでは、『東方朔秘伝置文』の読書のありようを充分にとらえたことにはならないであろう。数多く確認されている写本¹⁸、それも記載された内容について考察を加えねばならないと思われる。それをさらに具体的に確認するために、『東方朔秘伝置文』の板本と写本のうちの一冊とを比較して、そこから「東方朔」と名づけられることがふさわしいと考えられた知識の内容についてみていきたい。

ここでは岩手県三戸市似鳥字嘸ノ坂の三上家に伝来した『東方朔秘傳』を写本の代表として取り上げ、板本との対応を探り、こうした視点からの追究の出発点としたい。¹⁹当該書は縦二三・七センチ、横一六・二センチで、全三二丁から成る。目次に当たる部分はないが、それぞれの記事の最初には、見出しに記載内容が記されている。今、全文を翻刻紹介する代わりに、各項の見出しを写し、仮目次とし全体を通じて記事に1から16までの番号を付してみる。なお()内に仮に表紙の表を1才とし、裏表紙を31才として大まかな頁数を示しておく。また原本の破損等により読み難く字数が確定できない場合は「」で示した。

- 三上家本『東方朔秘傳』(仮目次)
- 1 「 間紙上ヨリ拔春(書力)(1ウ)
- 2 天地風雨様之事(2才)
- 3 天地風雨之占形等入様之事(2才〜3才)

- 4 支干性之事(3才〜3ウ)
- 5 世間善悪之事(4才〜4ウ)
- 6 東方朔置文ノ事(4ウ〜5ウ)
- 7 降雨の徴候(6才〜7ウ)
- 8 年中運氣日和考(8才〜20ウ)
- 9 日輪ヲ候テ吉凶ヲ知ル事(20ウ〜22才)
- 10 月輪ヲ候ヒテ吉凶ヲ知ル事(22才〜28才、ただし、23才から内容が変わり、その年の干支による作物の豊凶に関する記事となつてゐる)
- 11 正月朔日朝雲出見其年善悪ヲ知ル事(28才〜29ウ)
- 12 種浸シ最吉日ノ事(29ウ)
- 13 麻糸時最吉之事(29ウ)
- 14 畑時吉日之事(30才)
- 15 麦時吉日之事(30才)
- 16 降雨之徴候(30ウ)

一 見して分かるように三上家の『東方朔秘傳』は、6の「東方朔置文ノ事」を含みこんで一書としてゐる。さらに8の「年中運氣日和考」が安政六年(一八五九)以降の『東方朔秘傳置文』の異称であることを考え合わせると、この『東方朔秘傳』には二重に、いわゆる「東方朔の置文」が採録されていることになる。

具体的な記述内容と比較してみると、板本の内容は8の「年中運氣日和考」、9「日輪ヲ候テ吉凶ヲ知ル事」、10「月輪ヲ候ヒテ吉凶ヲ知ル事」がそれにあたり、6の「東方朔置文ノ事」の部分には板本にはない記事が書かれている。このことは二戸地方にこ

れまでに知られている『東方朔秘傳置文』以外の伝本がかつて存在していた可能性を示唆するものである。ただし注意しなければならぬのは、前節までに検討してきた『東方朔秘傳置文』の読書の姿からすれば「東方朔」の名のもとに伝承的な、あるいは経験から帰納的に導かれた民間の干支と農事の豊凶との関連を主張する知識が結晶していたことも想定しなければならないという点である。その「東方朔」は果たして書冊の形をとっていたか、どうか。全く茫漠とした問題である。

この問題はこの地方及びこの地方と交流があつた地域の「東方朔」を名乗る写本の全体像をとらえれば、あるいは見通しが得られるかもしれない。今後を期したいと思う。そうした考究の方向性に望みを持つのは、三上家本『東方朔秘傳』の10の「月輪ヲ候ヒテ吉凶ヲ知ル事」の中途から、その年の干支による作物の豊凶に関する記事が、隣接する軽米町蛇口の川口家に伝来した『東方朔』(巻末に文化二三年(一八一六)の書写年記がある)の「十幹十二枝を以世の中分之事」とよく似ているからである。最初に三上家本の当該部分の冒頭を示し、続いて川口家の『東方朔』の対応箇所を示してみよう。

一 甲子年四分但シ六分正二三四月水増稲吉赤稲悪シ麻粟稗
吉大豆半吉六月日早八九月降雨病流行ス(三上家本23才)

甲子之年八四分六分也、正・二・三・四水増。黒稲吉、
白稲半吉、赤稲・麻吉、粟・稗吉、大豆・小豆半吉、六
月日照、八・九月雨降病有⁽²⁰⁾

三上家の『東方朔秘傳』の一部と川口家の『東方朔』とがほぼ同じ内容を記載していることは明らかである。しかし、他の部分は必ずしもはつきりとした対応関係が見いだせるわけではない。

今のところ、三上家本の『東方朔秘傳』は、この地域において「東方朔」と称し得る知識をかなり広く、かつ、やや未整理のまま収載して成立しているらしいという見通しを得るにとどまる。

未整理、あるいは一冊の書物として完成を目指したものでないという性格を裏付けることとして、三上家本で注意しておいた方がよいと思われるのは、7「降雨の徴候」と16「降雨之徴候」というほぼ同じ趣向の記事が二つに分かれて記述されている点である。7では「旱天ノ後二虹ノ現ハル、八雨ノ徴ナリ」「虹ノ色緑色ノ殊ニ鮮カナル八雨ノ兆ナリ」「麻ノ葉ノ裏ヲ頭ハス八雨アルトキ八降雨ノ徴ナリ」「降雨前八炊煙ノ拂ヘ方悪シキモノナリ」「霖雨ノ時雷鳴アレバ天気ニナルモノダ」といった記述であり、内容や判断の観点に大きな違いはないように思われる。それが別々に記されているのは、おそらく単純に、この『東方朔秘傳』が筆録者の覚書、メモとしての性格を持っていたことを示していると考えてよいのではないだろうか。

なお、三上家本の成立年次は記載がなく、不明という他はないが、1「「聞紙上ヨリ拔春」に新聞記事からの抜き書きらしい箇所があることから明治以降の書写になるものと推測される。さらに、この『東方朔秘傳』と一緒に同家に伝来してきた『豊凶考察の為月観察の記録(仮題)』という記録が、この家の明

治から大正、昭和にかけての当主で、この地域の篤農家として有名であった三上惣吉氏によって書かれていることが明らかであることから、近代の写本と考えてよいであろう。しかし、近代の写本であっても、未解明の問題を多く含んでおり、多くの『東方朔秘傳置文』の写本のなかでも、この三上家本『東方朔秘傳』の重要性は極めて大きいものと言うことができるのである。

以上、板本を念頭において写本の『東方朔秘傳置文』の記述内容の検討、分析を僅かながら試みた。その結果、内容面においても東方朔の読書態様が独特であることは理解できたのではないだろうか。読書という行為は、書物を有用なものと認識し手元に置くべきであると、読んだ者が考えた時に、もう一冊の書物を生み出すことになる。即ち、筆写し、さらには関連すると判断された知識を書き留めることまでもが読書には含まれるのである。『東方朔秘傳置文』の読書態様を追究することで、こうした書物の創成の問題も見えてくる。これは文字文化の側からは書物の編集としてとらえるべき事象であり、民俗文化の側からは文字との出会い、伝承の記録化として受けとめるべき状況であろう。

写本に注目して『東方朔秘傳置文』の読書態様の一端を探ってみた。こうした検討はさらに広く、深く行なわれなければならないが、ここでは序論めいた検討にとどまった。それでも板本が先行して存在している場合でも庶民生活の進展や利用の実態を解明しようとする場合に写本に注目すべきであることは明確になったものと思われる。

五 小括と今後の課題

近世に刊行された陰陽道書『東方朔秘伝置文』に焦点をしぼって、狭義の読書の様相、東方朔が登場する伝承説話、さらに類似の表題を持つ写本の検討を通して広義の読書研究が惹起する問題について考察してきた。その結果として東方朔という名辞を核としてさまざまな生活上の知識や農事にまつわる経験が、庶民生活のなかで意識されたり、文字化されたりといった様相が見通せたと考えよう。

近世以降の陰陽道の研究としては他の陰陽道書との比較が必要であり、読書研究としてはさらにデータを蓄積して検討を継続しなければならぬ。前者の問題意識からは既に大雑書類を対象として考察を別途行なってきた⁽²⁾。また後者については文字や書物に表象されるさまざまな事象を、現代の民俗事象に限定せず、さまざまな階層や集団のなかの伝承にまで目配りしていく必要を感じている。加えて文学史研究における仮託の問題なども重要な観点となり得ると考えられる。そして具体的な読書や書物の集積の様相については、歴史研究とも協業が必要であると考えている。本稿はあくまでもそうした多様な領域からのアプローチのために向けて民俗研究からの可能性を登録するものであった。

註

- (1) 拙稿「東方朔溯源 近世陰陽道書の成立に関する考察」(『文経論叢』二八巻三号、一九九三、弘前大学人文学部、四一―六八頁)
- (2) 以下の拙稿を参照されたい。「東方朔覚書」(『日本文化研究』一号、一九八九、筑波大学、三七―五五頁)、「東方朔追尋 近世陰陽道書の受容過程をめぐって」(『西郊民俗』一三三号、一九九〇、西郊民俗談話会、一―八頁)、「東方朔道遥 陰陽道の受容と展開の民俗的位相」(研究代表者・宮本袈裟雄「民俗宗教の西日本と東日本における構造的相違に関する総合的調査研究」(平成三年度科学研究費研究成果報告書)、一九九二、武蔵大学、五五―六三頁)
- (3) 長友千代治「河内柏原三田家蔵書関係資料」(同「近世の読書」、一九八八、青裳堂書店、四二〇―四五〇頁、所収)、四三四―四五〇頁。なお、三田家の読書生活については長友千代治「河内柏原三田家と行商本屋」(同「近世貸本屋の研究」、一九八二、東京堂出版、八七―一〇五頁)を参照。
- (4) 引用は「年々豫手扣」(一九八五、野辺地郷土史研究会)、三三頁に拠った。
- (5) 引用は貞享三年森田庄太郎板(弘前大学附属図書館蔵本)に拠った。ただし、私に句読点を加えた。
- (6) 引用は「年々豫手扣」(一九八五、野辺地郷土史研究会)、四四―四五頁に拠った。
- (7) 前掲注(5)に同じ。
- (8) 『年々豫手扣』(一九八五、野辺地郷土史研究会)、四六頁に「此年十一月朔日冬至之日天晴等閑なれ八明年麦作よし、日和も宜舗南風なれ八明年日照と曆指南有之申候、今日朝より東風ニ而雨降申候」という記載がある。残念ながら現段階では「曆指南」とはどういう

た書物が確定はできない。

- (9) 引用は仙台鉄道局編纂『東北の民俗』(一九三七、社団法人日本旅行協会)、一三五―一六頁に拠った。
- (10) 引用は清野久雄ほか『荒沢の民俗』(一九五六、荘内民俗学会)、八〇頁に拠った。
- (11) 『東方朔秘伝置文』の板本については前掲注(2)の「東方朔覚書」、四四頁に一覧表にして提示しておいた。
- (12) 前掲注(2)の「東方朔覚書」、参照
- (13) 引用は小井川潤次郎『いたこの伝承』(小井川洋夫編『小井川潤次郎著作集1/おいらさま・えんぶり』、一九七七、伊吉書院、所収)、九九頁に拠った。
- (14) 引用は小野和子編『長者原老嫗夜話』(山形県飯豊山麓の民話)、(一九九二、評論社)、一一―一三頁に拠った。なお、この資料は川島秀一氏に御教示を賜わった。記して御礼申し上げる。
- (15) 野村純一『庚申の夜の客』(同『昔話伝承の研究』、一九八四、三〇七―三三六頁、所収)、参照。なお、この昔話のなかで長寿をもたらす食物として九穴の貝もしくは老けずの貝が登場する点について注目し、資料を整理したことがあった。前掲注(2)の「東方朔逍遙」、五七―五九頁を参照されたい。その後、管見に入った九穴の貝が登場してくる昔話資料は次の二篇である。一つは佐々木徳夫編『宮城仙北夜話』(佐々木徳夫昔話ノート『天狗の足駄』)(一九九一、セイトウ社出版部)の一頁に載る「庚申のむかし」で次のように報告されている。

むがし。

庚申さまだが観音様のお精進の時だったべがな、ある家さ講中の人方七、八人集まって始ったんだどしゃ。すたれば、うんと格好悪り身なりした人が、

「おれもはめで(仲間に入れて)ける」
て来たんだど。

「ほんだらば」

て、はめだれば、

「ほんで、おらどこで先さ当番すつから来てけろ」

て言れで、皆でそこさ行ったんだど。すたれば、俎でお料理すんの見だれば、赤子は料理するように見えんだど、皆の眼さね。なんだ、これや気味悪り料理だ。食ねで逃げた方がいい、ど思つて逃げたどしゃ。

名前忘せただけんとも発起人の人だけ、なんぼなんだたて赤子など俎さ置いて料理などしねべ、ど思つて逃げねがったつんだね。

「さあ食べる」

て出されたの見だれば、九穴の貝だったど。

「九人分食え」

て言れで、食つて家さ帰つて来たれば、逃げた人達あ皆死んだど。そしてその人達の分も長生きしたどしゃ。

もう一つは野添憲治編『秋田・阿仁町高塚祐治昔話集』(一九九二、民話と文学の会)の二六八―二七〇頁に載る「庚申様」である。

むがし、むがし、ずつとむがしがら、このむらには庚申様があつたものだスな。

ある時、庚申様は直接おいでになるもんだがら、ありがたく拜んで、その晩は夜通しではあ、全員がその家さ泊まって、次の朝に帰ることに決めてたわけだスな。したところで、たいがい夜の十一時ころ、十二時ころになればア、夜通して話こしてるべきところなんだども、全員が居眠りして、こっくり、

こっくり眠ってしまつてスな。

ところがしやな、一人の人が眠ねで居たところで、庚申様がしやな、なんだが生まれだての子供みだいな物を置いて、ツキ、ツキと切つて、料理をしている訳だスな。

それでしや、

「今に明けを拝めば、精進料理でねぐ、魚料理が出るのはわがつてるども、こついう物を食せられたんでは、とてもかなわねエ」

ど、その人は逃げでしまつた訳だスな。

あどの人どは、眠つてで知らねもんだたえに、こんだ明けになつて拜んで、魚料理と同時に食つた吸物も、ご馳走になつたわけだスな。したとこで庚申様が、

「皆さんに今あげた吸物は、どなた様も食べたことのねエもんだス。これは味はどつがわがらねども、長寿の薬だもんだたえに、残さないで食べてもらいたい」と喋ると。

「庚申様、これはなんというものだスか」

「それは不老の貝というもんでな、むがししや、浦島太郎は八百八つまで生きだんだどな、それはしやな、浦島太郎が龍宮さ行つて、乙姫がらとくにこれをご馳走になつて、八百八つまで生きられだんだど。皆さんも八百八つまで生きられるがもしんねがら、まず食つて長生きしてけれ」

と喋るのたどな。

「これは珍らしい物をご馳走になつたじや」
つて、喜んで家さ帰つたどな。

途中で、仲間の男が居たので、

「お前はなんで、夕べは逃げだんだあ」と聞いたとじや。

「なしてでがつて。お前ど見ねがつたがもしらねども、俺眠ねで起きでだば、庚申様がこんだ、まるで生まれだての子供みだいな物を切つて料理してらけんて、あれを食せられれば大変だと、逃げで来たんだア」

つたど。

「んにや、それだど。それはしやな、お前が知らねんで逃げだんだア。それは不老の貝というもんで、浦島太郎が八百八つまで生きだのも、この貝ご馳走になつたからだだよ」

「んにや、ほんとだつてがア」

「ほんとだべよ。庚申様がしやべつたのたもの」

「んにや、それだば実に残念なことしたじや。俺もご馳走になればえがつたじや。俺が眠ねで見でらのが、悪かつたのたな。どつも羨ましじや」

と、その人どさたもつがつてはねで、口のおだりを舐つたわけだスと。

したつきゃなんし、舐つた人あ八百八つまで生きだけどなんス。本当に食べた人どは、百十まで生きだけどなんス。

なお、文中にある「不老の貝」は「ふけずの貝」と語られていたことを引用者(小池)からの問い合わせに対する編者、野添氏からの返信(一九九二年二月三日付け)で確認している。今のところ、老けずの貝は九穴の貝からの変化であるかと判断している。

(16) 八百比丘尼については大島建彦「八百比丘尼の伝説」(『八潮市史研究』一一号、一九九二、八潮市立資料館、六六—一〇一頁)が詳しい。

(17) 引用は藤田栄子『庚申』(一九九四、秋田文化出版社)、一九九頁に拠つた。

(18) 管見に入った写本については前掲法2)の「東方朔追尋」に、

さらに書写年次が判明する写本については同じく「東方朔逍遙」で若干、言及した。

(19) 三上家本『東方朔秘傳』の翻刻紹介は別に改めて行う予定である。

(20) 引用は、『軽米の古文書第一集 九戸軍記 東方朔』(一九九六、軽米町教育委員会)、六三頁に拠った。

(21) この文書については既に翻刻紹介を試みた。拙稿『豊凶考察の為月観察の記録(仮題)』 解題と翻刻』、『人文社会論叢』一四号、一九九九、弘前大学人文学部、一三〇頁)、参照。

(22) 拙稿「大雑書と民俗研究」(橋本萬平・小池淳一編『寛永九年版大ざつしよ』、一九九六、岩田書院、二二五-二三九頁)等を参照。

(23) 伊藤聡「伊勢二字を巡って 古今注・伊勢注と密教説・神道説の交渉」(菅原信海編『神仏習合思想の展開』、一九九六、汲古書院、七七-一二二頁)等を参照。

(24) 一例を挙げれば、山崎誠「もつ一人の白楽天 偽伝と偽書の世界から」(大田次男ほか編『白居易講座(第四卷) 日本における受容(散文篇)』、一九九四、勉誠社、一六三-一七七頁、所収)等。

(25) 横山俊夫ほか『日用百科型節用集の使われかた 地小口手沢相の電算画像処理による使用類型析出の試み』(一九九八、京都大学人文科学研究所)、橋川俊忠「史料としての書籍 蔵書史料学の可能性について」(『歴史民俗資料学研究』三号、一九九八、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、一七頁)、桂島宣弘「平田派国学者の「読書」とその言説」(同『思想史の十九世紀』「他者」としての徳川日本』、一九九九、ペリかん社、八九-一〇七頁)等の示唆、刺激を受けとめていきたいと念願している。

〔付記〕 本稿は平成一〇・一一年度文部省科学研究費補助金奨励研究

(A) 読書の多様性と伝承の形成に関する民俗学的調査研究の成果の一部である。